九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

今井源衛著『源氏物語の思念』

田坂，憲二
福岡女子大学助教授

https://doi.org/10.15017/11954

出版情報：語文研究. 65, pp.67-67, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《紹介》

今井源衛著『源氏物語の思念』

田坂憲二

本書は、著者の第五論文集であり、全三章十六編より成る。全編重要な問題提起を含むため、最初に全体の目次を掲げる。（副題略）

第一章　平安朝女流文学私見／一条朝における女流文学の位置／色好みの変容／平安朝文学における僧侶の恋／王朝文学と「そらごと」／道綱母の愛憎　第二章　光源氏の自己愛／夕顔の性格／宇治の山里／浮舟の造型／親と子／源氏物語における年中行事の役割／源氏物語の文学史的位置／異文三題　第三章　紫式部「道長妾」の伝承／紫式部の晩年再考／源氏物語の作者　〔附録〕源氏物語登場人物の性格と役割

第一章は、平安女流文学全般に関するもの。この部分の層の厚さが、同じく〝源氏〟を冠した第一・第三論文集とは少々異なる点である。巻頭の「平安朝女流文学私見」は講演記録であるが、著者の「前渡りについて」（『紫林照径』）「とりかへばや論」（『王朝末期物語論』）「王朝文学と『そらごと』」（本書）等々の成果が縦横に駆使されており、柔らかな語り口とは裏腹に、その内容はずっしりと重い。「王朝文学と『そらごと』」は、本書の骨格をなす論文の一つ。当時の所謂一夫多妻の習俗下において「そらごと」がいかなる役割を担っていたかについて、歌集・物語・日記等の幅広い作品の検討を通じて、その内実を明らかにする。「男たちが日常そうした嘘をつく工夫と努力を重ねたことと、又、その嘘を見抜いて我が身のありさまを確かめようとし続けた女たちの心の緊張とによって、この時代の文芸は豊かなみのりを得る事が出来た」という著者の言は、王朝文学の特質を実に巧みに言いあてている。「平安朝文学における僧侶の恋」は、研究領域の細分化が益々進む今日、時代・ジャンルを越えた深い学識を有するこの著者にして始めて可能な考察。

第二章は源氏物語に関する論考で、本書の中核をなす部分である。ここでは先ず「夕顔の性格」を取り上げたい。夕顔についてはこれまで、無邪気で大人しいあどけない女性として捉えられてきたが、それはあくまでも源氏の眼に映じた限りの夕顔像であり、夕顔自身は決して心中を源氏に見せようとしない「したたかな心の張り」を有していた女だとする。その論証過程には間然する所なく、従来の夕顔観ははっきりと訂正されねばならない。同時にこの論は、単なる人物論の枠内に自己完結することなく、「男には女心の秘奥は摑めないものだ、とでもいう思念」を、作者の意識下に推測することによって、源氏物語全体への展望を可能にしているという点でも重要である。この「思念」こそが、源氏物語のみならず王朝女流文学を貫く主要な要素であるというのが、本書における著者の一貫した主張でもある。「浮舟の造型」も、夕顔同様に、既往の人物論に修正を迫るものであるが、同時に、ここ数年囂しい源氏・竹取の相関についての議論の先駆ともなった。「宇治の山里」の、宇治院・宇治の荘園に関する史料整理も貴重。又、コピーすら殆ど不可能であった「源氏物語の親と子」が、全面改稿されて収められたのも有り難い。

第三章は、改訂された新装版人物叢書『紫式部』と併読すべきもの。「紫式部の晩年再考」は特に重要である。

附録の「源氏物語登場人物の性格と役割」も、構想上の役割について大胆に踏み込んでおり、類似の人物総覧とは一味違って有益。

（昭和六十二年九月、笠間書院、A5判、七〇〇〇円）